

2005年 チェルノブイリ・春（4月1日～4月13日）

菅 聖子

チェルノブイリ事故から19年目の春。

トヨタ財団からの研究助成をうけて行っている共同研究「チェルノブイリ原発事故の実相解明への多角的アプローチ：20年を機会とする事故被害のまとめ」の一環として、カタログハウスが主宰するプロジェクト、「第7回・被ばく地に住む11家族の定期訪問」に参加させてもらうことになった。私にとってベラルーシは7年ぶり。ロシア、ウクライナへの取材は初めてのことになる。同行者は、広島大学・原爆放射能医学研究所の元所長の佐藤幸男先生、臨床検査技師・細胞検査士の松浦千秋さん、通訳のジーマさんであった。

過去にベラルーシを訪れたことがあるとはいえ、このテーマを深く掘り下げてきたわけでもないし、確固たる信念を持って支援活動を続けてきた人たちとも違う。そんな私が、再びチェルノブイリへ行って、いったい何ができるのだろうか。正直なところ、出発前は少し重たい気持ちだった。

だが旅の準備をしながら、写真を眺めていたとき、ふっと気づいたことがあった。そこに写っていたのは、笑顔もあれば、すまし顔もあるごく普通の家族のポートレートだ。

「ああこの人たちも今の時代を、笑ったり恋をしたりケンカもしながら生きているはず」

そう思ったら肩の力が少し抜けた。チェルノブイリ被災地にいる普通の人たちは、この20年をどんな思いで過ごしてきたのだろう。ごく平凡な日本人である私が、彼らの隣で座って話をし、声を傾けてくることにも、意味があるように思えた。

●モスクワ（ロシア共和国）——シニャエフ家

「今度同じような事故が起きたら、誰が処理に行くというのでしょうか」

アレクセイ・シニャエフさん（43歳）

4月初旬のモスクワは、雪どけの季節だ。道路脇に積みあがった灰色の雪が溶け、次々にできる水たまりの上を、車がスピードを上げて走っていく。空気はピッと肌に冷たく、吐く息もまだ白い。

驚いたのは、7年前には薄暗い印象だったモスクワが、目を見張るほど変貌していたことだ。スーパーやレストランが街じゅうに増え、室内の照明は明るくなり、夜になればネオンが瞬く。経済も上り調子なのだろう。街のあちらこちらに、建築中のビルが目立った。

そんなモスクワの街に暮らしている、シニャエフさん一家を訪ねる。

アパートの前で私たちのワゴンが止まると、建物の前にたた



シニャエフさん一家

ずんでいた黒いコートの男性が、にこやかに近寄ってきた。

「やあやあ、待っていたよ！」

シニャエフ・アレクセイさん（43歳）だ。部屋にうかがうと、妻のエレーナさん（42歳）、息子のゲナジさん（21歳）と娘のナターシャさん（19歳）がそろって出迎えてくださった。3DKのアパートに家族4人が暮らしている。

アレクセイさんは一見健康そうに見えるが、頭痛や倦怠感がひどく、ふだんから満足に働くこともできないという。92年にチェルノブイリ事故による障害者として認定され、最近も3ヶ月の入院で点滴治療を受けてきたばかり。「今は大きな問題はない」というものの、表情は曇りがちだ。

なぜ、チェルノブイリから遠く離れたモスクワで、アレクセイさんが障害を持つことになったのか。それは、彼が事故後の除染作業員だからだ。

1986年7月。事故から3ヵ月たったある夜のことだった。

突然、警察官と軍人が家にやって来て、「30分以内に集まるように」とアレクセイさんに告げたという。予備軍人だったアレクセイさんにとって、軍の命令は絶対だった。何をすることもわからぬまま、指定場所に行ってみると、男たちが250人ほど集まっていた。身体検査が行われ、すぐにチェルノブイリに送り込まれた。

夫の突然の召集に、あわてたのは妻のエレーナさんである。当時はゲナジが3歳、ナターシャはまだ8ヶ月だった。

行き先も知らずに出て行った夫が気に入り、二人のおさなごを抱えて若い母親は夜道を追いかけた。だが、彼女が集合場所に到着したときにはもう、夫は出発した後だったのだ。

「小さな子どもが二人もいるのよ。いったいどうすればいいの！ パニックを起こしそうでした。あのときが、この19年間で一番つらい出来事です。夫も私たちも、チェルノブイリに行くとは知りませんでした。知っていたら、こんなことになるかわかっていたら、もちろん彼が出かけることを許さなかったわ」

エレーナさんは途方にくれた若き日を思い出しながら語る。

いっぽうアレクセイさんは、放射能についての詳しい説明もないまま、事故炉近くでがれきを処理する日々だった。装甲車に乗ったり、ときには手作業で。

作業中から体の異変を感じたが、8月に家に戻ってからは、頭痛や下痢や倦怠感がひどくなった。時間がたつにつれ幻聴や幻覚にも悩まされるようになり、ついには仕事を退職。今も頭痛や倦怠感はおさまらず、入退院を繰り返す生活だ。

「事故から20年近く、あつという間の日々でした。生きるために必死でした。医療を獲得し、補償を勝ち取るための闘争もあった。思い出したくもない苦々しい経験がたくさんありますよ」

事故後の除染作業に携わった人は、「リクイデータ」と呼ばれ、旧ソ連全土に60万人とも80万人とも言われている。あの恐ろしい事故のあと、防護服も不十分なままに、体をはって作業をした男たち。しかし、その作業を行った数万人はすでに亡くなり、アレクセイさんのように精神神経系の健康被害に悩む人も多い。

最近のアレクセイさんの悩みは、リクイデータに与えられてきた医療費や公共料金、交通料金の免除、保養などの「特権」が、廃止の方向にあることだ。

「特権のかわりにお金を支給するというんです。それも50ドル弱という、わずかな額ですよ！」

ロシア首相のフラトコフから、保健大臣に対する指示書には『リクイデータが予測どおり減って

いない』と書かれていたという。

「そんな侮辱の言葉がありますか。特権が国家予算に負担をかけているのですが、これでは、われわれに早く死んでくれ、と言わんばかりじゃないですか！」

国の命令で命がけの労働に借り出されたというのに。

「結局国家にとって、私たちは使用済みのゴミにすぎないんだ」

吐き捨てるような言葉の激しさに、私は何も言うことができなかった。

しかし、国に対しての不信をあらわにしながらもなお、アレクセイさんは言う。

「心配なのは、チェルノブイリ原発のこれからです。5年間という設計だったはずなのに、事故後19年たった今も、石棺は崩れかけたまま。それを思うと涙が出てくる日もありますよ。今度あのような事故が起きたら、誰が処理に行くのだろう……と」

私は彼に問うてみた。

「そんなに悲しい思いをしているのに、なぜチェルノブイリを思うことができるのですか。忘れたくはないのですか？」

アレクセイさんの答えはこうだった。

「どれほど現場がひどいことになっていたか、私はこの目で確かめてきた。だからこそ心配なんだよ。事故は私の体に潜んでいる。忘れることはできないんだよ」

シャニエフ家は、おだやかな雰囲気だ。ただよう、みるからに仲のよい家族だった。みながアレクセイさんの体調を気づかい、いたわっている。妻のエレーナさんは、この19年間でいちばんつらかったのは、夫がいなくなったときだと言った。除染作業から戻ってからのアレクセイさんは、健康を取り戻せないままだが、一緒にいれば顔色の変化もよくわかるし、そばで声をかけることもできる。

そして大人になった子どもたちは、両親を尊敬する心を忘れていない。

「父がチェルノブイリに行ったことを、友だちに隠していた時期もあります。差別があったので言いたくなかった。でも、父の健康のことはいつもいつも気になっています」

とナターシャさん。この19年間、障害を負った父の痛みを、子どもたちもさまざまな形で背負ってきたのだと思う。一家の柱である父が働けなくなるということが、家族にとってどれほどの痛手であることか。

妻や子どもたち言葉を、アレクセイさんはじっと聞いていた。欠けてしまったたくさんのものを、家族の愛で埋めていくように。不幸な事故で得た父の病が、一家を強く結びつけていた。

●モスクワ（ロシア共和国）——ステパノフ家

「国家の関心は、もうチェルノブイリにはありません。だから自分たちでがんばっていくしかない」
ニーナ・ステパノフさん（49歳）

ステパノフ家も、父親が除染作業員の家族だ。

しかし、昨年両親が離婚したため、お父さんの姿はない。自宅アパートにいたのは、母親ニーナさん（49歳）、長女のヴァレンチナさん（24歳）と弟のワーニャ君（12歳）。そして、ヴァレンチナさんのボーイフレンド、サーシャさんだ。調査を始めた7年前には、父母姉弟の4人家族だったが、その間に父の姿は消え、今年にサーシャさんが加わった。時の流れ、子どもたちの成長を感じさせる変化だ。

父親のセルゲイさんとは、連絡が途絶えた時期もあったそうだが、最近子どもたちはたびたび父親と会って映画を観たり、食事をしたりしているという。母のニーナさんの話によれば、彼はアルコール依存症気味だが、その他には大きな健康障害がない。とはいえ、除染作業とアルコール依存症にまったく関係がないかといえ、それは誰にもわからない。仲間の死や、自分もいつかは病気になるかもしれない不安。普通の人が持つことのないストレスを、リクイデータは抱えている。

ニーナさんは、ウクライナ生まれだ。チェルノブイリにほど近いバラノフカという町で生まれた。「夫の体の心配もありますが、やはりふるさとが近いので、チェルノブイリ事故を忘れたことはありません。私が生まれ育ったバラノフカは、森も川もあって、本当にいいところ。しかし、その土地が汚染され、現地の子どもたちは甲状腺ガンにかかっている。悲しいことですが、どこへも逃げようがないのです」

長女のヴァレンチナさんは、もうすっかり大人の女性だ。大学に通いながら建築資材の会社で働いている。すでに自分のアパートも手に入れた。離れて暮らす父については、「お父さんの役割は子どもの養育。ときどき会うくらいでは中途半端です。父親は少しでも何かをすると過大評価されるところがある」と、冷静な意見。自分の結婚も見据えながらの率直な男性への意見だ。

そして、しっかりものの姉と母の間で、スーツ姿でビシッときめたワーニャ君がほほえましい。

「歴史学者かジャーナリストになりたい」

と言い、「日本人は何の宗教を信じているの?」「経済はどう?」と、しきりに質問をしてくる。そして日本の同じ年頃の子どもと比べると、ドキッとするほどジェントルマンだ。一家のただ一人の「男」としての役割を果たそうとしているようにも、姉のボーイフレンドに対抗して背伸びしているようにも見える。

「この 19 年、衣食住を獲得するために、必死でがんばってきました。国家の関心は、とっくにチェルノブイリ以外のことに移っています。今は圧倒的にテロ対策のほうが重要です。自分たちの生活は自分たちで守っていくしかないんです」

おそらく、歯をくいしばるような経験もしてきたはずだが、ニーナさんの言葉は、さらりとしている。母と娘、現実を見据える女性たちの強いまなざしが印象的だった。

●コロステン（ウクライナ）——キリルチュク家

「ここでの生活はトラブルばかり。だからせめて、家族は仲良く暮らしていたいんです」

ナターシャ・キリルチュクさん（29 歳）

モスクワから飛行機で南下し、キエフへ向かった。肌寒いモスクワの空気から一転しての、ぼかぼか陽気。ヨーロッパの雰囲気ただよう街並みが美しい。

夕暮れの街を、車でさらに西へと向かう。進行方向には、巨大な火の玉みたいな太陽が見えた。あたり一



キリルチュク家

面オレンジ色に染めながら、ゆっくりゆっくり落ちてゆく。自然がつくり出す圧倒的な光景から、私はひとときも目を離すことができない。あの日も、こんなふうによりと太陽は沈んでいったのだろうか――。

コロステンは、かつては9万人が暮らした地方都市だ。事故後、中等度汚染地域に指定されて2万人が町を去り、現在の人口は7万人になった。町中のアパートに暮らすキリルチュクさん一家を訪ねる。

オレグさん（35歳）と妻のナターシャさん（29歳）、娘のアーニャさん（11歳）と息子のサーシャ君（8歳）の4人家族。そして、近くに暮らすオレグさんの母、エレナさん（56歳）も加わった。

何かこの一年で変わったことはありましたか、と佐藤医師が問いかけたとたん、エレナさんの表情が曇る。

「夫が半年前に60歳で亡くなりました。高血圧でした。機関車の操縦士として、チェルノブイリの方に行っていたのが原因だと私は思っています」

涙をぬぐう姑の横で、ナターシャさんが語る。

「私は勤め先の銀行で、お葬式の給付金を担当していますが、最近鉄道関係者が亡くなる人が多いんです。原因はわかりませんが、事故と関係があると思います」

続けてオレグさんも言う。

「私が働いている列車の整備工場には、チェルノブイリゾーンから運ばれてくる車両があります。私たちにはどこから来たものかわかりませんが……」

どんな話もチェルノブイリと関連づけて語られる。

この人たちは、常に汚染の現実と隣り合わせで暮らしているのだ。身近な人の死、病気、体調不



キリルチュク家の食卓

良。何かが起きるたびに、「ああまた、チェルノブイリの影響だ」と思うのだろう。その気持ちは19年たった今も、少しも薄れてはいない。

そんな大人たちの話を、二人の子どもたちはソファに座って神妙に聞いていた。子どもたちにとっては、生まれたときから日常の中に汚染がある。しかも弟のサーシャ君は、「突発性血小板減少性紫斑病」という血液の病気を持ち、数回の入退院を繰り返している。風邪をひきやすかったり、高熱が出たり、ふだんから不調の日が多い。両親の心配は絶えないが、それでも今日のサーシャはとても元気だ。姉のアーニャと顔を見合わせては、くくっと笑う。子どもたちが笑顔だと、家中が明るい。

チェルノブイリ事故当時、オレグさんは学生、ナターシャさんはまだ子どもだった。子育て真っ最中だったのは祖母のエレーナさんである。

「この19年？ 私にとってはいつもどおりの年月でしたよ。正常に時間が流れていった感じね。事故が起きたとき、最初は不安でいっぱいだった。子どもを非汚染地域に疎開させたこともありました。この町から移住したいと考えたこともあるけれど、そのうちあきらめたわ。コロステンは1300年の歴史があり、とても美しい町。気候もいいところですからね」

喜びも悲しみも、すべてを包み込んで淡々と生きてきたお母さん。彼女には、大地にどっかと足をつけたおおらかさがある。

息子のオレグさんが、横から口をはさんだ。

「僕にとって、19年はとても早かったよ。子どももできたし、本当にあつという間だった。あと5年もすれば、アーニャは結婚するかもしれないしね（笑）」

「あら、ほんとね。あなたがナターシャと出会ったのはいつだったかしら」

エレーナさんがにっこりとほほえむと、話題はオレグさんとナターシャさんの出会いのころに移っていった。オレグさんが年の離れたナターシャさんを見初めたのは、なんと彼女が14歳のときなのだ。

若い時代を回想する二人の表情は、恋人時代に戻ったようにむつまじい。

「さあさ、召し上がれ！」

テーブルの上に、赤カブのサラダ、ニシンのマリネ、マッシュポテトに豚肉の煮込みなどなど、心づくしの家庭料理が並んだ。

「ああ、愛情にあふれてる……」

私は思わずつぶやいていた。夫婦も、親子も、子どもたちも、この料理の数々も。なんと温かな愛に満ちているのだろう。すると、ナターシャさんが私をまっすぐに見つめて言うのだった。

「この町の生活にはトラブルがいっぱいある。だからせめて、家族の中だけでも、トラブルがないよう仲よく生きていたいんです」

何気ない家族の幸せ。でもその幸せを守るための強い意志を、彼女のひとことに感じた。

●ジトーミル（ウクライナ）——シャブルク家

「事故が起きず、プリピャチに住み続けられたなら、娘はこんなことにはならなかった」

アントンのおばあちゃん（66歳）

玄関が開いた瞬間、おばあちゃん目から、みるみる涙がこぼれ出た。松浦千秋さんをきつく抱きしめ、声も上げずにただ泣いている。おばあちゃんを受け止める松浦さんの目にもまた、涙が光っていた。どんなに言葉を重ねるよりも、こうして会ってふれあうだけで、人と人は強く共感でき



アントンとおばあちゃん

るのだ。夕暮れの部屋には、悲しみといたわりの思いが響き合っていた。

シャブルク家のお母さん、アラさんが 41 歳の若さで亡くなったのは数ヵ月前のこと。アルコール依存症だった彼女は、ある朝、ベッドで目を覚まさないまま。

過去 6 回の訪問を重ねてきた佐藤医師と松浦さんは、その情報を得たときから、何よりも残された家族を心配していた。どうしているのだろう、早く会って元気であるか確かめたい——。その思いが、冒頭の抱擁となったのだ。

「娘のことを思うと、まだ心が痛い」

そんなおばあちゃんを支えるように、傍には端正な顔だちのアントン (21 歳) 君が立っている。大人になったアラさんの息子は、決して泣いて取り乱したりはしなかった。しかし彼の眼差しもまた、悲しい事実を受け入れられぬまま、さまよっているようだった。

シャブルク家は、チェルノブイリ原発からわずか 1.5 km のプリピャチ市内に暮らしていた。アントン君が 2 歳、弟のオレグ君が 5 ヶ月のときに事故が発生。その二日後には「臨時疎開」だと告げられ、強制的に町を出ることになる。とるものもとりにあらず、母と息

子は町を離れたが、食料品店の店長だった父のビクトルさんは 4 ヶ月ほど町に残り、さらに大量に被ばくした。

事故。被ばく。やむにやまれぬ生活の変化。

これらは、一家の心身に大きな影響をおよぼした。今でこそアントン君は立派に成長したが、溶血性貧血という病気で体が弱く、発育も他の子どもよりずいぶん遅かった。

そして、アラさんとビクトルさんが陥った、アルコール依存という深い闇——。プリピャチに、家も、家財道具も、ペットも、何もかもを置いてくることになったとき、大人たちは健全な心まで忘れてきてしまったのだろうか。



かつてのシャブルク家

「事故が起きず、プリピャチにあのまま住むことができたなら、娘はこんなことにはならなかった」
おばあちゃんが涙声でつぶやく。

アントン君は、母の話は口にしなかった。一緒に暮らす父についても多くを語らない。

「父は今も問題があります。体調が悪いので働いていません」

頼りにできるたった一人の弟オレグ君は、今年の秋まで兵役中だ。今日はたまたまおばあちゃんが田舎から出てきているが、ふだんは父と二人の生活。仕事をしながら、家事もみな自分でやっているらしい。やさしく、礼儀正しく、どこかストイックな雰囲気は、両親がアルコールにおぼれる姿を見てきたからだろうか。「自分がしっかりしなくては」という思いが人一倍強いように見えた。

「今は、建築現場でガレキの処分などを行っています。肉体労働はつらく、給料もよくない。でも、弟の兵役が終わったら、二人で一緒にやりたいビジネスがあるんです。車の免許もとりたいし、通信大学で教育も受けたい。いろいろな可能性を探りたいんだ」

彼の口から、たのもしく希望的な言葉が発せられた。幼いころから家族の悲しみを一身に背負ってきた。そんなアントン君が、本当の自由を手にするのはいつの日だろう。

「すべて、自分で背負わずに、みんなに助けてもらってね」

との松浦さんの言葉に、アントン君が答える。

「僕にも、何でも相談できるいい友だちができたんだよ」

「ガールフレンド？」

「そう」

うなずいた彼が、初めて笑った。

●ブラーギン（ベラルーシ共和国）——ロフツォバ家

「汚染地ということは、あきらめています。汚染されていない都会より、汚染された村のほうが、気持ちよく暮らせるんですから」
ロフツォバ・ナターシャさん（36歳）

キエフから、夜行列車に揺られてベラルーシ共和国のゴメリへ。地平線を見はるかす、牧草地帯の一本道を車でひた走る。

ロフツォバ家が暮らすブラーギン州トブリン村は、チェルノブイリ原発からわずか35kmのところにある。

小さな木の家、のんびり走る馬車、スカーフを巻いたおばあさん、放し飼いのガチョウやにわとり。まるで絵本の世界にまぎれこんだような風景だ。あまりにものどかで、人々は普通に暮らしているから、うっかりすると忘れてしまいそうになる。そうなのだ。ここは放射能によって汚染されている。

14キュリーという値は、人が暮らせるぎりぎりの汚染度だという。15キュリー以上は強制移住区域となるが、15がダメで14ならよいという



ロフツォバ家

根拠はどこにあるのだろう。

「ズドラストヴィーチェ！」

玄関先で声をかけると、子どもたちがころがるように飛び出してきた。クリスティーナちゃん(2歳)、ユーリヤさん(10歳)、そしてナースチャさん(12歳)の三姉妹。後ろからにこにこ笑って出てきたのはお母さんのナターシャさん(36歳)とおばあちゃんだ。

ナターシャさんは村の国営農場に勤務しているが、現在は3年間の育児休暇中。4年前に再婚した夫、ウラジミールさん(25歳)はまだ若く、通信大学で学ぶ学生だ。今日は大学の集中講義で、留守にしている。

「勉強したいのなら、行ってらっしゃい！」

どーんと構えて夫を送り出す、ナターシャさんは、そんな肝っ玉の大きな女性のようにだ。

農村の家は、今まで訪問してきた都市部のアパートとはずいぶん違う。井戸で水を汲み、薪でペチカをあたためる生活だ。トイレは外の小屋だし、電話もない。それでもロフツォバ家の居間には、新しいテレビや冷蔵庫が並んでいた。古いものと新しいものが混在して不思議な感じだ。

「この家はもう古く、修理が必要なので、来年は村内で引っ越す予定」というナターシャさん。

おそらく農村の生活も、これからどんどん変わっていくのだろう。

昨年6月には、この村で暮らしていたナターシャさんの父親が65歳で亡くなった。

「肺がんで、自宅で見つけました。父の病気が事故と関係あると思うか？ もちろん、あるに決まっているじゃないですか。最近このあたりでは、肺を患う人がとても増えているんです。父の場合は、発見が遅すぎました」

ナターシャさんは涙を浮かべる。

この村では、子どもも大人も、事故後の病気が増えている。はっきりとはわからないけれど、放射能の影響だと思っている。それは恐怖も似た不安だろう。しかしそれでも彼女は、この村で生きることをやめようとは思わない。

「汚染については、今では日常的に考えることはなくなりました。もう、あきらめているし、馴れてしまった。たとえ汚染されていても、この村にいるほうが気持ちよく暮らせませす。ゴメリの街に行くと、汚染されていないはずなのに体調が悪くなるんですよ」

目に見えず、匂いもしないものを恐れているにもかかわらず、あきらめるしか、忘れるしかないでしょう、というのが正直な気持ちかもしれない。

自家製のウォッカ「サマゴン」や、茹でたじゃがいも、チキンの香草焼き、カツレツなどが食卓に並び、みんなでお昼をいただいた。どれも自宅でとれたものばかり。ほくほくのじゃがいもの甘さ、歯ごたえのあるチキンの香ばしさ！ ここにはこんなに豊かな食卓があるのだ。

2歳のクリスティーナが、ぱくぱくとじゃがいもをよく食べた。ナースチャとユーリアは、小さな妹の世話を焼きながら、くるくると母の手伝いをしている。どっしりとした母のもとで、まっすぐに育っている女の子たち。健康に育ててほしいと祈りながら、ト布林村をあとにした。



ロフツォバ家の食卓

●ゴメリ（ベラルーシ共和国）——コノワロワ家

「4月26日は私が結婚した日。楽しい日ですが、一方では悲しいことを思い出す日でもあります」
ナージャ・コノワロワさん（43歳）

ゴメリ市郊外の低層アパート。コノワロワ家には、お母さんのナージャさん、息子のニコライさん（23歳）、娘のイリーナさん（19歳）が久しぶりに顔をそろえていた。いつもは、食品輸送会社に勤めるニコライさんがゴメリ市内の祖父母の家に暮らし、商業専門学校に通うイリーナさんも、ゴメリ市内の学生寮に暮らしている。だから、ふだんこの部屋にいるのは、ナージャさんだけだ。美しく、たくましく成長した二人の子どもたちには、それぞれに結婚を考えるガールフレンドやボーイフレンドがいるという。

しかし、母親であるナージャさんは、半年前に6年間の結婚生活にピリオドを打ったばかり。「6年ほど一緒に暮らしましたが、夫が酒を飲むようになり、彼の態度やマナーがたまらなくなつて、とうとう別れました」

と語る。ナージャさんにとっては二度目の結婚生活だった。90年に、ニコライさんとイリーナさんの父親は亡くなっている。4歳と9歳の子どもを残しての、突然の事故。半年ほどはショックで何が起きたかわからない状況だった。その後8年間はシングルマザーとして過ごし、再婚してからは、ニコライさんとイリーナさんを家に残して、嫁ぎ先とを行ったりきたりしながら生活してきた。

そんな母の人生を見ながら、育ってきた子どもたちは、早くに自立したのだろう。人生観も大人びている。

「最近は正式ではない事実婚が多い。1～2年で別れることもあるから、そのほうが僕自身はよいと思っている」というのは兄のニコライさん。

「人はそれぞれの人生の中でミスをするもの。私はそういうミスをおかさないようにしたい」というのは、イリーナさん。再婚し、離婚した母を、淡々と受け入れているところがとても大人だ。

ナージャさんは、石油ポンプステーションで働きながら暮らしている。収入は、公共料金や家賃などを払うだけで精一杯だが、それでもひとりになった開放感からか、表情はさばさばしていた。

チェルノブイリの事故が起きたとき、ナージャさんのおなかの中にはイリーナさんがいた。

「イーラは、甲状腺に異常が見つかったが、今は問題はなく過ごしています。この19年間で苦しかったのは、事故のことよりも家族の事情ですね。夫が亡くなったのは90年。財政危機でお金のレートが変わってしまい、お葬式でさえ予算がありませんでした。そんな中、コーリャ（ニコライさんの愛称）は早く大人になり、男としての責任を負ってくれました。

私が結婚したのは、4月26日なんですよ。でも、その数年後にはチェルノブイリ事故が起きた。また、イーラ（イリーナさん）の誕生日は9月1日ですが、夫が事故で亡くなったのもその日です。結婚式や誕生日は楽しい日ですけど、一方では悲しい記憶の残る日になってしまいました」

●コルマ（ベラルーシ共和国）——スピチェンコ家

「娘も私も甲状腺がん。事故さえなければ普通の社会人として生きてこられたのに」
スピチェンコ・ワレリーさん（45歳）

スピチェンコさん一家が暮らすコルマは、のどかな農村地帯。明るいからし色の壁が印象的な小さな家で、ワレリーさんと、妻のワレンチナさん（43歳）の二人が待っていた。娘のオリガさん（21歳）は入院中、息子のサーシャ君（17歳）はサッカーの合宿中。肝心の子どもたちがいなくて拍子

抜けしたが、ご夫婦お二人を囲んでのゆったりとした時間となった。

サーシャ君はスポーツ万能の、おふたりの自慢の息子だ。サッカーではコルマ地区の代表選手で、クロスカントリースキーも地区で入賞する腕前。息子のことを語る二人は、本当にうれしそうだ。

姉のオリガさんは96年に甲状腺がんにかかり、手術を受けてまもなく10年になる。甲状腺がんは、唯一チェルノブイリ事故との関連が、WHOによって認められた病気だ。今回は久しぶりのヨード治療のための入院だとか。病状が悪化しての入院というわけではなさそうで、ホッとする。オリガさんは一昨年に結婚し、子どもも出産した。チェルノブイリでつらい経験をした子どもたちが、母となって強く生きている。

スピチェンコ家の災いは、オリガさんだけでは終わらなかった。彼女が手術を受けた2年後には、父のワレリーさんも同じく甲状腺がんと診断されたのだ。

この村は、16キュリーという汚染値で、政府の移住政策にひっかかった地域だ。一家はいったんは移住したが、仕事がなかったため戻ってきた。その末の、親子ともどもの甲状腺がん。ふたりが同じがんにかかり、そろって甲状腺を摘出したことは、どう考えても異常事態である。

「事故後、病気になり身体障害者となったことが、一番つらい。事故さえなければ普通の社会人として生きられました。娘も私も、事故前はみんな健康だったのに……」

ワレリーさんの声には力がない。消すことのできない事実が重たくのしかかってくる。

事故当時、オリガさんは3歳、サーシャ君はまだ生まれていなかった。

「サーシャを生むことには、確かに不安がありました。しかし、事故後も私たちの生活は続いています。他の家族にも子どもが生まれていましたから、私も生むことにしたんです。きょうだいがいないのは寂しすぎますから」

と、ワレンチナお母さんは言う。そのサーシャ君が立派なスポーツマンに成長したことは、何よりもうれしいに違いない。

コルマでは、事故後さまざまな食品の汚染度を保健局で測定していた。しかし、どんな作物にどれくらい汚染があるかわかった今では、ほとんど測定することはないそうだ。

「食べものはほとんど自給自足。でも、森になっているものは注意しています。黒すぐり、ブルーベリーは近くにありますが、汚染が残っているので採りません。きのこも、放射能蓄積度が高い種類は採らないことにしているんです」

現在は、ワレリーさんの障害者年金（月100ドル程度）によるつつましい暮らしだが、ここでもテーブルにはごちそうが並んだ。チキン、じゃがいも、きゅうりのオープンサンド、そしてワレンチナさんお手製のケーキ。あたたかい手作りの食卓。

「ご夫婦水入らずの写真が撮りたい」と注文したら、ワレリーさんがワレンチナさんの肩をぎゅっと抱き寄せた。「やめて！」と照れながらもうれしそうなワレンチナさん。病気の夫と娘を励まし支えてきたのは、まぎれもなくこの明るい女性なのだと思った。

●ミンスク（ベラルーシ共和国）——デミチェンコ家

「移住したことに後悔はありません。しかし、汚染された私のふるさととは、人が个性的に生きていたあたたかい町でした」 デミチェンコ・ゲナジさん（36歳）

背後に汚染地域を広く抱えるゴメリから、列車に乗って5時間。首都ミンスクへと向かう。この街には、汚染地域から移住してきた多くの家族が暮らしている。

そのうちのひとつ、デミチェンコさんのお宅を訪ねた。

市内にあるアパートの6階。父親のゲナジさん、続いて長男のスタニスラフ君（17歳）とお母さんのイリーナさん（36歳）、次男のまだ小さいアレシ君（7歳）、そして、ゲナジさんのお母さんが握手をしながら迎えてくださる。

実際の年齢よりも若々しく、息子と並ぶと兄弟のように見えるゲナジさん。だが警察官という職業柄か、話しぶりはハグレがよく自信にあふれている。事故当時は、彼も妻のイリーナさんも18歳だった。イリーナさんはゴメリで働いていたが、実家のある高汚染地域ブラーギンに戻って被ばく。長男のスタニスラフ君は、そのときお母さんの胎内で被ばくしたという。

事故から2年後、スタニスラフ君の体調が悪くなり、白血病に似た反応が出た。思い出しつつ語るイリーナさんの表情が曇る。当時はどんなにか子どもを心配し、汚染地域に行った自分を責めたことだろう。しかし、嘆き悲しんでばかりはいられない。子どものためにできるかぎりのことを、と走り回った母の心情が伝わってきた。

「血液科の先生から、類白血病反応と言われてからは、毎年専門医をまわって、すべての検診を受けてきました。今はミンスクにあった病院が、汚染地域のゴメリに移ったので、検診の機会は減りましたが、すっかり元気になって、結果がとてもいいんです。スタニスラフは自立した大人になりました」

本人は、18歳という微妙な年ごろで寡黙だが、180cmの長身のハンサムな青年。来年は専門学校への進学も決まったという。顔色もよく健康そうだ。

一家は、93年に故郷ブラーギンからミンスクに移住してきた。ゲナジさんは移住についての思いを語る。

「私たちの悲しみは、自分が生まれ育った故郷を離れなければならなかったこと。そして、もうひとつの悲しみは、その土地が汚染されてしまったことです。私の親戚はみなブラーギンに住んでいて、しょっちゅう集まっていました。しかし、その全員がブラーギンを離れたのです。親戚同士のコネクションが途絶えたことは言うまでもありません」

移住して10年余り。被災者ということで優先的に家を与えられたため、住宅難に苦しむミンスク市民からねたまれたり、休暇の時期を優先的に選べることで、やっかまれたりしたこともあったという。

ブラーギンは私が知る限り、のどかな農村地帯だ。ミンスクという大都会での生活に慣れるまで大変だったのでは？ と聞くと、次のような答えが返ってきた。

「あのころ私たちはまだ若かった。ここで住む場所を確保でき、職場ができ、友人もできました。確かにブラーギンはほとんどの人が顔見知りで、人が個性的に生きていたあたたかい町だった。ミンスクの生活は便利ですが、人間の個性が失われているように思います。生活様式はまったく違うし、どちらにも一長一短があるので、どちらがよいとは一言では答えられません。事故がなかったら、ブラーギンに残っていたでしょうが、今はここで暮らすことに後悔はありません」

私と同世代の両親は、たんとんと自然に、街での生活になじんできたようだ。

「ブラーギンにはもう誰もいませんが、年に一度はお墓参りに行くようにしています。今回はイースターの1週間後に、私が必ず行きます」

と語ったのはおばあちゃんだ。「必ず行く」というひとことに、故郷への思いが詰まっていた。

●ミンスク（ベラルーシ共和国）——チワルコバ家

「今月末に甲状腺の手術をします。いろいろあったけれど、良性腫瘍だし、今は心配はしていません」 チワルコバ・オリガさん 23歳

3人の、ステキな女性たちの出迎えを受けた。母親のニーナさん（45歳）、長女のオリガさん（23歳）、次女のジェーニャさん（21歳）。家の中は、女性ばかりで華やいだ雰囲気。特に、20代前半の娘ふたりの美しさは輝くばかりだ。姉妹は仲良く並んで床に腰かけ、なにごとかささやきあつては、にこにこ微笑んでいる。

現在オリガさんは、モスクワ経済統計大学の通信学部に通学し、看護婦をしながら企業のリスクマネジメントなどを学んでいる。ジェーニャさんはゴメリ大学地理環境学科の3年生。

屈託のない笑顔を向けるふたりが、白血病に苦しんだ経験を持つ妹と、甲状腺の病気で手術を予定している姉だとは、すぐには信じ難かった。

チワルコバ一家は、91年にミンスクに移住してくるまで、ゴメリ州のベトカ地区に暮らしていたという。ベトカはその年に移住対象区域となった高汚染の村で、現在はもう誰も住む人はいない。

次女のジェーニャさんは事故から2年後の88年、盲腸の手術をした後に足が痛いと言い出した。4歳のときのことである。原因がすぐにはわからず、1ヵ月ほど病院をたらいまわしにされた挙句に、急性リンパ性白血病と診断された。一家の闘いが始まったのは、このときからである。

ジェーニャは当初ゴメリ州立病院で治療を受けていたが、両親はよりよい医療を受けさせたいと、モスクワの病院にジェーニャを連れて行った。いったんは拒否されたものの、ゴメリ州立病院の院長に紹介状を書いてもらって出なおし、モスクワの病院で受け入れてもらえたという。その間、姉のオリガは親戚の家に預け、父親はいったん仕事をやめた。

娘の命を救いたい……。それだけを願い、行動した両親の思いが通じたのだろう。ジェーニャはモスクワの小児血液病センターで、4ヶ月の入院と通院治療を行い、翌89年には寛解となって戻ってきた。

その後ミンスクへ移住し、10年余りが過ぎた。

「事故からの20年は、本当に早かったですね。トラブルを克服しながらなので、時間の流れは本当に速く感じます」

と、母のニーナさんは言う。

ところが、ジェーニャさんの健康への不安が薄らいできたところに、今度はオリガさんの甲状腺異常が判明した。ニーナお母さんの心痛はどれほどだろう。

「とにかく、子どもが心配です。今度はオーリャが手術をしなければならないのですから」

心配そうな母の横で、意外なほどスッキリとした表情のオリガさんが語る。「2年ほど前から甲状腺腫で治療を受けていたのですが、手術が決まったんです。でも、良性腫瘍ということなの



チワルコバ家

で、もう心配はしていません」

まるで、母を励ますように言うオリガさん。医療従事者らしくすべてを受け入れ、納得した上で彼女は手術に向かうのだ。

姉妹の病気が、チェルノブイリ事故のせいだと言い切ることはできない。だが、子ども時代を、高汚染地域のベトカで暮らしてきたふたりの過去を消すこともできない。病に立ち向かっていくオリガさんの勇気を応援したい。

● ミンスク（ベラルーシ共和国）——マスコ家（マスコ兄弟の2家族）

「子どもが独立して社会人になったら、私は村にどうしても帰りたい。ここがどんなに便利でも、私は故郷のほうがいい」 アレキサンドル・マスコさん（42歳）

お父さん同士が兄弟のふたつの家族。ビクトル・マスコ家と、アレキサンドル・マスコ家。今日はビクトルさんが仕事の都合で不在だったが、そのほかはみな揃って、合計8人。家の中は、騒々しいほどのにぎやかさだ。

お父さん不在のビクトル家は、妻のスベトラーナさん（41歳）に3人の娘。上からオリガさん（18歳）、ヴァレンチナさん（16歳）、タチアナさん（13歳）。オリガさんはモスクワ国立社会大学ミンスク校で学び、検事か弁護士を目指す才媛。ヴァレンチナさんは今年経済大学の試験を受ける受験生、ターニャさんは科学生物学専門クラスの8年生だ。

アレキサンドルさん（42歳）の家族は、妻のベラさん（40歳）、息子のビクトル君（18歳）、娘のエレーナさん（17歳）。ビクトル君はモスクワフラン大学ミンスク校でエレクトロニクスを学ぶ。エレーナさんは、医科専門学校の2年生で看護婦を目指している。子どもたちはそれぞれに、好きな勉強や夢に向かって、まっすぐ進んでいる様子。

近所に住んでいるせいか、年齢が近いのためか、5人のいとこたちはきょうだい以上に仲よしだ。たったひとりの男子ビクトル君も、女の子たちに負けないおおらかな雰囲気を出しているがすがしい。

マスコ家の父親はふたりとも、除染作業員だった。当時、森林組合で働いていたビクトルさんも、消防士だった



ビクトル・マスコ家（上）と
アレキサンドル・マスコ家（下）

アレキサンドルさんも、それぞれに原発から 5km 地点あたりで、家畜を洗ったり、車両を洗ったりする作業に従事したという。

両家がかつて暮らしていたナローブリャ地区は、原発から 60km 余り離れた高汚染の村だ。92 年に移住政策によってミンスクに転居してきた。

現在、アレキサンドル父さんは、ミンスクにあるマーケットの警備員として働いている。子どもたちの健康のためにと故郷を離れたものの、アレキサンドルさんのナローブリャへの思いは、並々ならぬものがある。

「ナローブリャには、家も親も残してきました。私は街の空気より、故郷の空気のほうがあっている。いつだって故郷に帰りたと思っています」

大の男の、正直すぎる弱音を、みんなが黙って聞いていた。ふだんから、家族の間ではこんな会話が交わされているのだろう。妻のベラさんは淡々と語る。

「女にとっては、故郷を思う暇なんかありません。子どもがいるところが、私の故郷です。子どもたちが大学に行く年齢となり、都会にはさまざまな教育を受けるチャンスがあることも感じていません」

生活に順応できず苦しむ夫と、子どもの将来を見据えて前向きに歩む妻。土地が変わっても柔軟になじんでいけるのは、確かに女性のほうだろう。日本に当てはめて考えても、同じことだと思う。

そんな両親の話を聞きながら、ビクトル君が冷静に言葉をつなぐ。

「僕たち家族にとっては、移住してミンスクに順応することが一番の苦労でした。僕らはメンタリティとしては村人なのです。まだまだ街の人間にはなりきれません。都会人になるには、3 世代必要でしょう」

息子の言葉を聞きながら、アレキサンドルさんは深くうなずいていた。

「子どもが独立して社会人になったら、私はどうしても故郷に帰りたい。妻には、私と一緒に来るか、それともミンスクに残るか、選択の自由をあげたいと思う」

私たちが訪ねる前日まで、アレキサンドルさんはナローブリャに帰っていた。故郷では川釣りのシーズン。雪解け水があふれる川で、釣りを楽しんできたという。

「魚の汚染は大丈夫ですか？」

と質問すると、

「問題ないよ。事故直後には汚染値が上がったけれど、10 年たったころには問題がなくなった。昨日もおいしい魚を釣ってきましたよ」

日が傾きインタビューも終わるころ、テーブルには豪華な夕食が並んでいた。スベトラーナさんお手製のボルシチ、スペアリブや布林チキ(クレープ)。そしてメインディッシュは見事なスズキのオープン焼き。おいしそうな魚を口にしようとした瞬間、冗談なのか、本気なのか、アレキサンドルさんが笑いながら言った。

「チェルノブイリの魚ですよ」

一瞬どきりとしたが、魚は私の口にあっという間におさまり、とれたてのぶりぷりした白身が舌の上で溶けていった。食卓の豊かさを思えば思うほど、おいしいと思えば思うほど、その食卓に潜む影がいまましい。

今は健康な子どもたちが、今後もずっと健康でありますようにと祈りつつ、マスコ家をあとにした。

後記

街の様子を外から眺めるだけなら、チェルノブイリはもう、歴史上の出来事だと思ったかもしれない。しかし、一般家庭を訪ねて知ったのは、普通では考えられないほどの病気の多さや、除染作業者の多さ。事故について漠然としたイメージしか持っていない自分には、衝撃だった。

もちろん、人々は毎日事故のことばかり考えて暮らしているわけではない。日々の生活があり、食べるため、子どもを育てるために必死で生きている。そして、そんな日常の中に、事故の現実はいく根強く浸透しているように感じた。19年がたった今も、日々の暮らしのどこかに、小さな不安がいつもあって、何か起きるとその不安が噴き出してくる。これは、多くの人の話から、実感できたことだった。

人は余裕のない状況に置かれると、それまで覆っていた鎧がはぎとられ、本質があらわになるものかもしれない。病気の家族を抱えて、身を寄せ合うように絆を強めていける人もいれば、心の弱さからアルコールにおぼれて亡くなる人もいた。人って強いと感動する反面、あっという間に壊れてしまう弱さも感じる。その両方抱えるのが私たち人間なのだと思う。

医療技術もなく、お金も持たない自分が「してあげられる」ことなど何もなかった。ただ、さまざまな人のさまざまな思いに共感し、つながり続けていくことだけ。それしかない気がした。シャブルク家での、松浦さんとおばあちゃんの抱擁を見たとき、その思いは確信となった。向き合って、声を聞いて、心で共感することが、どれほど人に安心と勇気を与えるかを。

行く先々であたたかく迎えてもらったことは忘れられない。食卓に並んだごちそうやウォッカ。人々の明るい気質と心を尽くしたもてなしに、感激の毎日だった。どこへ行ってもたいてい最後はウォッカで乾杯となり、飲めもしないのに酔っ払ってしまった。楽しい話題も尽きず、笑っぱなしの2週間だった。

そんな笑顔の内側に、ひそやかに包まれている人々の思いに耳を傾けるため、もういちど秋にはベラルーシを訪れたいと思っている。



ロフツォバー家と松浦さん、佐藤先生（ベラルーシ・ゴメリ州ブラーギ